

## 〔新刊紹介〕

内田賢治編著

## 『大沼枕山逸事集成』

福井 辰彦

大沼枕山は、幕末から明治のはじめにかけて、江戸・東京で活躍した詩人である。永井荷風『下谷叢話』では、思想と政治の時代を尻目に、詩酒の世界に生きた文人として、印象深く描かれている。

本書はその枕山について、知友・門人が残した回想を集成したものである。川合仁里「枕山先生逸事」、石川文莊「大沼枕山先生逸事」、清潭「狐禅狸詩」（「下谷吟社」）「川合仁里」の二編を抄出、高田竹山・高林五峯「植村蘆洲翁を語る」（対談。蘆洲は枕山第一の門人）の四点のほか、関連資料として枕山『房山集』、下谷吟社（枕山の詩社）『観月小稿』、高古香（枕山の弟子）『古香一掬』の三詩集の影印を収め、『同人集』『下谷吟社詩』入集一覽」を付す。

枕山の伝記については、その大部分を

『下谷叢話』に依拠している現在、これらの資料が読みやすい形で一冊にまとめられたことの意義は大きい。

知友・門人の回想という性格上、すべてを事実と考えるわけにはゆくまいが、本書によつてはじめて知り得る逸話は少なくない。

不明確だった枕山と梁川星巖の關係については正式な師弟關係ではなかったと仁里や清潭の回想に見える。仁里の回想には、ペリー艦隊来航の折、毎夜長剣を研ぎ、外夷払うべしとの義氣を示したとか、上野彰義隊に身を投じようとして果たさなかったといった、時世に関わろうとする枕山の一面も描かれる。また、清潭が伝える、清詩の新奇は喜ぶべきであるが、実は所謂新奇なるものは唐詩に悉く具わっているという言葉は、枕山の詩観をうかがう手がかりとなろう。竹山・五峯の対談で弟子

の詩を「むやみにほめるお世辞の好い人」と評されているのも面白い。

さらに、本書には内田氏による詳細・綿密な語注・補説が備わる。特に補説では、本文中に見える詩句・事項の出典・他出を能う限り挙げ、異同を示しており、極めて有用である。こうした堅実な調査・考証の中で内田氏は、安政地震の際に枕山が詠んだ「地震行」の一枚刷を発見、詳しい注釈を付し、検討を加えている。

こうした成果を踏まえた内田氏による新たな枕山論が待たれるところである。本書の刊行によつて、枕山研究、幕末・維新时期漢詩文研究のさらなる進展・深化が期待される。

（太平文庫76、太平書屋、二四六頁、二〇一四年一二月刊、本体価格七〇〇〇円）

（ふくい・たつひこ 上智大学准教授）